

小路の奥：創作

著者	宇野， 太郎
雑誌名	龍南
巻	2 5 0
ページ	8 4 - 9 8
発行年	1942-02-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/8495

小 路 の 奥

文 三 乙 宇 野 太 郎

作りの悪い襖が半分開き放しになつてゐる。その奥の部屋で、房子の背中に花模様のはつきり見えた。大きな菊の花びらが、むしろ薄暗い部屋の中に浮いてゐる。鏡臺に向つて化粧してゐるらしい。助膜だと聞いて、臥つてゐるものと許り思つてやつて來た大三郎は驚いて了つた。

「なーんだ、病人が化粧なんかして、寝とらんか〜」

大三郎は開き放しの障子から見えてゐる房子の背中に叱言をあびせた。顔を合す前から挨拶拔きの叱言に、房枝はびつくりして鏡に向つてゐた上半身をくると廻した。色が白い。時代遅れの瓜實顔だが病人らしい瘦顔ではなくむしろふくれてゐる。父と二人の間借り生活であるが、父程のやつれがないのは若さが蔽ひ隠すのか。眼鼻立ちが整つてゐるといつても深く強い感情の裏付けを聯想さす印象を與へるのではなくて、娘の教育に全然勝手の解らぬ父一人を相手に貧しいながらも甘へて育つた女の子のわがまゝらしさであつた。

寝くづれたパーマネットの髪が立つて一層頭が長く見えた。

「兄さんか、誰かと思つたら……今から醫者に行くのよ、だから」

と言ひかけたまゝ、手鏡で後の髪始好をみる爲に斜に座り直して、鏡臺を横見に見入る。従妹でも「兄さんか」と呼ぶ間柄では遠慮もなく化粧を續けたが、胸を病む者が手鏡を持つた片手を後頭部に振り上げて迄の顔作りはそのまゝ見

て居られぬものがあつた。

「よせ、よせ、化粧なんか！ 歩いて醫者通ひなんて、冗談ぢやない。そんな事してたら助からんね」

「ひやかしに來たの」

半分冗談を打消す様に、大三郎はすかさず言つた。

「馬鹿、眞面目に言つてゐるぢやないか」

顔が少し綺麗だと直ぐ自惚れるのか——そんな氣持が心の底ではげしく動いたが、それは言はなかつた。

「行くなら早く行つて、歸つて寝ろよ。そんなに丁寧に顔作りせんでもよからう」

「顔作りぢやないわよ……寝亂れ髪で町は行けやしないわ」

「町中だつて？ すぐそこぢやないか。千田さんなら」

「だつて……」

「どうして又家に來てもらはないのだい」

房子は此れには答へないで、大三郎の言葉に反抗する様にそくさと鏡臺の前を片付けると、病人らしくもなく、から／＼と下駄の音をさせて出て行つた。

醫者に來てもらうのと、こちらから出掛けるのでは先づ治療代が違ふ。収入も多くない保険關係の仕事をしてゐる叔父と二人暮しでは房子は自分から勝手に出掛けて行くのであらう。その位の事は直ぐに判る。しかし安靜を第一とすると聞いてゐる病氣だけに、自分の身をいたはらない房子の態度が大三郎にはあさはかに見えて、自分で歩いて醫者に通ふ理由をとがめずには居れなかつた。元より叔父の前なら、その生活の貧しさを秘めようとする弱味を衝く様で、言つて了つた後では何か氣の毒に思はねばならぬ様な言葉も、房子の前では大三郎は黙つて居れなかつたのだつた。

房子も叔父も出て行つた後、晝下りの靜かな部屋に一人残つて、お恵みの様に隣の二階屋の軒先から落ちて來る汚れ

た疊の上の半疊程の陽當りに、火鉢を移して、其の上に徹ひかぶる様にまんとくるまつた体をくつつけ、大三郎は房子の歸りを待つ間、タドン火にかけた藥罐のしゅん／＼たぎる音を聞くとともにしに聞きながら、叔父と房子の生活をおもつた。

房子は早く母に死別した。しかし房子にとつて不幸であつた以上に、叔父にとつては大きな打撃であつた。といふのは房子を産んだのは、叔父の二番目の妻で、最初の死んだ妻は、房子の母の姉に當る。死んだ姉の後にその妹を迎へて房子を設ける事の出来たのはせめてもの喜びであつたが、産後幾許もなく第二の妻も逝つた。二人の姉妹は嫁ぐより早く呼吸器病で續いて仆れた。姉をもらひ、その妹を又、人にすゝめられれば斷る事もせずにもらひ、一緒になれば兎角凡々ながら平穩な結婚生活を送れる様な、人の良い生眞面目な一本調子の叔父は、一方男氣のない、甲斐性なしと親類達にも見られ、それは第二の妻を失つた後、續いて叔父を襲つた商賣の失脚から二人を全くみじめな生活に追ひ込んで失つた。叔父は祖父の言ふまゝに、その援助で祖父と同じ呉服業を開かしてもらつたのであつたが、むしろ單調でもお定りの仕事をする役所の事務に適した生眞面目さは、殊に巧智がその人の偉さとも又は徳とも見做され、又それなくしては商賣上發展する事が出来ない様に思はれてゐた時代、そういふ事を信じ手際よく運んだ人々の間では打負かされずには居らなかつた。だまされて高く仕入れ、客に値切られれば根負けで安く賣拂つた。といふ事許りではない。元々信念に裏付けられた正直一本といふ強さがあるのではなく、人の良さはつまらぬ寄附や投資にも利用されたい。最初の失敗はしかし借錢も少くて先づ良かつた。親類の幾人かで償つて新しい出發をした。(しかし何んと無造作に男一生の仕事が選ばれたのであらう、と大三郎は良く叔父を思ふ度に思ふ。親代々からやつてゐるといふ理由や、もうけが大い等といふ慾で、人に強ひられ、すゝめられて、叔父は無自覺にもその職業を選んだのであらうかと、疑ひ且腹立たしくさへ思ふ。しかも叔父は次男である許りでない。兄弟には男の子は捨てる程居た。新しい出發も、もう少し周囲の理解があり、叔父の自覺を要求しその希望を受入れる所があつたなら、そして叔父自身自ら第一回の失敗に省みたなら)同じ

奥服では行く行きそうにもなく思へたらうものを、「やはりだめだつたか」といふのは、大きな借財を眼の前にほうり出されて始めて親類の者達の心に刻まれ得る教訓でしかなかつた。

房子と叔父はそれから裏長屋に引き籠り、叔父は保険の下受け、高等小學を終へた房子は女學校に通ふ從姉妹や姪を羨み、憎みながら會社に通つた。學歴で引目を負ふ房子が、彼等に對抗する殆んど唯一の武器であり、内心の慰めは死んだ母の顔を受繼いだ美貌であつた。實社會は、ひがみかゝつた心に一層悪く作用する様に見えた。同じ心の弱味をかくし合つて又當らず觸らずになぐさめ合ふ女達はたくさん居た。會社に勤める様になつて、房子が年も行かず、人眞似にもバーマネットをかけた髪を見ると、髪形だけでも女學校卒業の者と同列に見られたいといふ切實さを理解しないではなかつたけれども、その淺薄さには從妹ながらも大三郎は憤りとも、同情ともつかない佻しい氣持を感じた。そしてそれは自分に一片の愛情でもあつたら、何時か房子の眼を開いてやらねば、といふ昂ぶつた氣持に迄なつてゐた。

叔父にとつても又その後の生活は歪んだものでしかなかつた。二人の妻の死んだ後、十年もたつて又一度後妻を迎へた事もあつたが、それは迎へるといふより、男一人の生活を見兼ねた端の者が本人の意志も何もあつたものでなく「のさ、りものがあつた」と喜ばしそうに押し付けたのであつた。それは直ぐ不縁になつて了つた。只その結果は益々みじめであつた。大三郎は叔父を見る度に家の用を引受けてくれる女のない男の生活が、慰め様もなく空っぽで、恐ろしい程味氣ないものである事を思つた。それで居て、やけ酒を飲んだり、別にあべれたりする譯でもない。いやあべれる程、何か不満をぶちまける程、元氣があれば、端の者も或はかへつて救はれる思ひがするだろうし、第一甲斐性なし等と思はれる事もなく、自分で女の一人位選んで來る位のは出來ぬ事もなからう。が叔父は境遇の不満をひたすら自分の心に向つて愚痴を言ふだけで、それを繰返す内に何時かそれも別に新しい涙を流す様な感動を覺える譯ではなく、窮狀を人に訴へもしなければ、人が勿体ぶる程の世話も別に心苦しさを感じるといふのではない。御禮の挨拶をしても、年賀狀の極り文句を讀んだ後の様な感じであつた。それだけ一方呆けた様でありながら叔父は何時も落着きがない。酒を飲ん

だ後の様に同じ事を何度も言ふ。それも誰か他の者が口挟むのを恐れて、遑を入れない口早さで、短かく不明瞭に二三度くりかへす。人に問ひたゞしもしない、反駁するのでもない。多くは自問自答して愛想笑ひをする。勿論一應こちから何か問へば答へはするが、一應の答へに止つてそれつきり自分の意見等は述べる事がない。話の途切れた氣づまりに、よく紙片に落書きをするが、見ると「一萬圓將に領收候也……」「萬圓將に領收候也……」「何行にも割のはつきりした楷書で書いてある。大三郎達の話には生返事で、この紙片を眼遠に置いて眺める叔父の様子は、今にも胸のポケットから認印でも出しかねない様子であつた。それは大三郎にとつてまざ／＼と叔父達の窮狀を見せつけられる様で苦しくてならなかつた。此度の房子の病氣には、叔父は牛乳を一本づつ大儀そうに買つて來ては房子に飲ました。月極めにすれば第一安いし、配達してもらへるので房子は父が自分で行かなくとも良いではないかと言つたが、それは父の窮狀をよく知つての上での事であるだけ無理に當り散らしてゐる様で、叔父も又房子の言葉を納得する前に無言で受流す習慣の如くなつてゐる様子であつた。体温を計るにも房子は父にたのます自分でし、水銀柱も自分で振つて元に下した。病人自身が自分の熱を計るものが、あるものか、軽い病氣でもないのに、と私達は嫌になる程何遍も言つたが、房子は私達にそう言はれても、かへつて父に何遍も同じ依頼を催促しなければならぬ面倒さより氣にならぬらしい。「すぐしてやる」と言ひながら何かとぐ／＼してゐる父を相手にする事が余計嫌らしい風であつた。

毎日三度自分で熱を計り、体温表に書込んで、赤い丸點の下るのを房子は楽しみにしてゐたが、大三郎達は病人に對するその精神的影響をひそかに心配した。

房子が肋膜炎といふ診斷を受けたのは第二の會社を退いた二月許り後のことである。最初の會社は高等小學を出て直ぐ務め、三年足らずで辭した。只なんとなく疲勞するといふのであつたが、願ひ書には肋間神經痛と書いた。自覺症狀があつたのではなくそれでも書かなければ、只疲勞するでは辞められないからだつた。その後半年もぶら／＼してゐると體が回復したと言ふより一度勤めた身は怠惰な一日を持て餘し出して、又何んでも良い仕事にでも出たいといふ職場へ

の強い郷愁を感じ始めた。丁度折よく、履歴書等は後廻しで良い、人手が足りないから直ぐ出て来て欲しい」といふ口をそこに勤めてゐる友達に聞いて飛びつく様にその會社に入つたが、無造作に採用するだけあつて可成り良い加減な會社であつた。「人格を疑はねばならぬ様な係長」「あんな所、もうこり／＼」「友長さん(友達の名)が相變らず通つてるの私には解らない」房子はそんな事だけしか話さないが、一月か二月勤めぬ内に、履歴書も出さず終ひでこれも止めた。そして此の退社理由には偽つて肋膜炎と書いたが、事實偽りに使つた病氣が已に房子の胸にその頃から巢喰ひ始めてゐたらしい。大儀そうな體のうごきは、むしろ未だ自覺されない病氣のせいではあつたらうが、二番目の會社を辞めた後では房子は急に大人びた様に見え、おとなしくなつた様に思はれた。第二の會社で何かを與へる様な經驗をなめたのではないかと、大三郎は好奇心を働かした事もあるが、パーマメントは相變らず装つても大三郎達の話にも少しは素直に耳を傾け、理解する様になつてゐた。肋膜炎で床に着く一月許り前の事である。大三郎は久し振りに房子達の家を訪ねたのであつた。

塗装のはげてぼろ／＼に落ち、鉄のゆるんだ様なきしみ音で車體をゆすつて走る郊外電車が、埃を立てゝ通つてゐる道から折れて細路地を少しは入つた所にある格子戸の家の、一番奥の借間に房子と叔父は居た。そこに行くには、格子戸の横のくどい戸を抜けると、一方の壁沿ひに狭く暗い庭道が裏方に通つてゐる。アスファルトに光る街の明るみから一步此の庭道に入ると、ほら穴にでも入つて行く様に眼がくらみ、壁の冷たさが身近に感じられた。此の庭道に沿うて壁とは反対側に、通りから入つてくれば、向つて右に相前後して三つか四つの家庭が借間の中で營まれてゐるのであつた。鶏を飼つてゐる家では炊事の流しに浸した足で鶏が平氣に疊の上に迄上つて來た。せはしそうにそれを追拂ふ聲を大三郎は行き過ぎに聞くのであつたが、それは不潔をいとふ心からではなくて、いたづら者を追拂ふ程の吞氣さで殆んど動物と人間の差別をなくした様な生活に馴れた者の聲といふ氣がした。此の狭い庭道を更に半分に區切つて壁側に炊事場が作られ、かまどの煙で壁は眞黒に煤け、流しからの漏れ水は米粒等を白く浮かして通り道さへあふれ、大三郎の

足音におどろいた鶏はその水を蹴つて破れ戸の下から地添ひに一度追ひ出された家の中へ再び逃げ込んで行く。白い羽毛が抜けて舞ひ上ると靜かに下りる。

房子達の借間は、その庭道の盡きた最後の二階のある家の下の間だけで、玄關といふより下駄抜き場と言つた方が相應しい土間から一方は二階の他人の家に通ずる階段が登つてゐる。即ち玄關は共通で、それも開けつ放しの土間には二家族分の下駄が亂雑にぬがれてあつた。それにその玄關の間と言ふのが全部で三疊もあらうか、階段との仕切りもなく房子達の借間の一部をなしてゐる。二階の人達は此の部屋を見下したまゝ上り下りする。

二階の借部屋といひながら、まるで此の一部屋は自分の家の内といふ感じはなく、こゝには只什器類を、それも茶棚等といふ恰好なものの持合せはなく、房子達は古びたタンスの中に納めたのを据えてゐる許り。多くは襖で仕切つた次の八疊を居間、寢室、食事所にしてゐた。しかしその部屋でさへ屢々天井の作りが悪いのか二階の騒音に悩まされた。自分の家らしく落着く事もできぬ家。元より人間の適應性は何時か馴れる様にできてゐるので、今日では叔父や房子はそんな事に別段苦しみも感じまい。しかし大三郎には、それがとりも直さず彼等の不幸を物語つて居る様に思はれ、又房子の病氣の原因さへこんな事にある様に思へるのだつた。

房子は障子を開けて、ぬれ縁もない敷居に腰かけて日向ぼつこをしてゐた。光の落ちて来る高い黒塀の向ふには、近所の二階立てに取り圍まれて切取つた様に狭い青空が覗かれた。並んで腰を下す時、体を支へた掌に冷たい疊であつた。二人は光の流れて来る狭い青空を期せずながら、房子は兩手の甲を尻に敷いて大三郎の話を聞いた。

「會社を辭めたつてね、又？」

「えゝ……」

「體がよく直りもしないのに勤めたりするからだよ」

「さうじゃないのよ」

「だつて俺はそう聞いたよ、叔父さんに」

「さうでもないはなきや今は仲々やめられないのよ。結婚だつて、しばらく延ばせないか等といふ所もあるさうぢやないの」

「ぢやなんだい？」

「只辭めたかつたのよ」

「ふん、僞せの病氣か」

「だつて……」

「まあ女だから良い様なものの、そう簡単に辭めたりは入つたりして良いものかね」

「良いなんて、兄さんの……理づくめね。私だつて輕はづみに入つた事は勿論今残念だと思つてゐるわよ」

「少しは後悔もしなけりや。……重役ぢやあるまいし、氣分が良いから出る、嫌だからすぐ止めるぢや……」

「何にもそんな積りはしないのよ」

「同じことだよ。やつぱし、未だ〳〵勝手過きる、といふか、……それに少しお説教じみるがね、私も一寸感じてゐる事があるんだ……房子の事でだよ」

それは或他の女から聞いた事でもあつたが、大三郎が日頃房子に言ひ度いと思つて居た事である。それに、蔭で惡口は言つても面と向つて色々と自分の缺點を忠告してくれるものは少い。憎まれ役を引受ける様な馬鹿は居ない。皆んな利口で……しかし大三郎は房子にだけは本人に直接言ひ度いと思つて居た事があつたのだ。それを大三郎は一應自分だけの僻目かと思つて居たが、同じ事がある女も房子を評して言つたらしい。

「又聞きだけだね、ある女が言つたさうだ」

「なんの事？ それに女の人つて誰なの」

房子は女らしく氣色ばんだ。

「氣になるかい。言つた人が」

「元の會社の人でせう、村木さん？ あの人よく人の事許り言ふらしいから」

「村木さんて人は知らんよ」

「一緒に何時か映画に行つたぢやないの、『格子なき牢獄』かなんか」

「いや、そんな人ぢやない、もつと身近な人で、言へば直ぐ判るけど、房子が氣にしなけりやならん様な人ぢやないんだよ」

「かくさないでも良いぢやないの、男らしくもない」

「さうおこるなよ」

「大阪の叔母さんでせう、あのおしやれ」

二月程前、例の如く着飾つて歸つて來た叔母に大三郎は同じ様な反感を感じるが、房子の言ひ切つた蓮葉な言葉をおどろいた。

「妙な事を言ふなよ。誰だつて良いぢやないか。俺の言ひ度いのは、人の名なんかぢやないんだ。蔭口の言ひ比べなんかしたいのぢやないんだからね」

「だけど、私は氣になるわ、どんな事を言つたの」

「あのね……まあ、おこるなら、おこつても仕方ないが、……あのね、房子はね、顔や身なりはよく手入れが出來てるが、ハンカチなんかが穢いし……それに」

房子はきつく大三郎の顔を見つめ、途端片手で大三郎を打つ眞似をした。

「おつと、打ちたけりや、自分でも打てよ」

「よくまあそんな事が……」

「いや、俺が言ふんぢやない……それに、持物、ハンドバッグ等の事だらうが、そんなものと着てゐる着物と全然調和がないんださうだよ。綺麗な着物の上に、美しい顔がのぞいてゐるだけだから作り人形の様だつて、そんな事を言つたさうだ。又聞きただけだね」

「馬鹿にしてるわ、一體誰なの」

「さう感情的になるなよ、俺だつて、少し馬鹿にし過ぎてゐると思ふよ。そう言ふ本人が第一、それに近くとも遠からずの人だからね。まあ、着物と髪の色等といった事に氣をとられてゐる人らしいからね」

「やつぱし、大阪の叔母さんね」

「いや、俺の言ひ度いのはその人の名ぢやないんだ。さう言つた事がやつぱし房子の短所をついてゐると思ふからだよ。相手の名を聞いたつて仕方ないぢやないか、ね、それよりさう言はれる理由が自身に有るか無いか問題だと思ふがね。さう言ふ事を房子にも解つてもらひ度いと、俺は前から思つて居たんだがね」

房子が理解するかどうかに関りなく、大三郎は胸の中に有るすべてを房子に吐きかけ度い氣に驅られてゐた。二年程前なら「そんな話は御免」といつて逃げを打つた房子も、年にしては小さい足先を、抜いだ一方の下駄の上に綺麗に重ねて、今日は伏し目加減に聞いて居た。「パーマネントの事だつて、もう一年そこら前だつたと思ふが、俺の言ふ事は聞かうともしないで、何んとか言つて反對したね。……」

兄さんはそんな女の髪的事なんかかまはないで學生らしく勉強だけしておれば良い……等と言つたのであつたが、そんな生意氣な事を無造作に言ひ放つた時大三郎は聞いてがっかりした。それに、その時は親類の人達が確かたくさん集つて居た時で、大三郎もあんまり若い女の事にこだはると思はれるのは嫌だつたし、器量自慢の房子の前では一層引け目があつて、少し赤面しながら退却したが、年もずつと少い女の癖して、何かそれで勝誇つた様な顔をした時、大三郎

は房子の美しい顔が腹立たしく癪に障つたが、又妙に淋しい氣がした。今更そんな事をくどく言ひ度いものではなかつたけれども、大三郎は續けて話した。

「時局柄一部の人々が問題にしてゐる様な意味で俺は、房子達のパーマメントに反對しようとは思はないし、又一方で、經濟的だとか、手數がかゝらぬとか、職業婦人にとつてはどうか、そんな事を楯にして禁止に反對してゐる人達に味方しようとは思はないがね、しかし、房子が、パーマメントを人眞似にする様な人でなかつたら、とひそかに思つてゐる譯だよ。」

結局言ひ度い事は、それをするかしないか、といふ事よりそれに對する心構へ、といふ様な事になるんだがね」
自分だけ解つた様な話をくどく大三郎は疊みかける様に言ふのであつたが、房子はその時意味もなく足先で地面をなで廻し、判つたとも、判らぬとも言はなかつた。しかし安靜を第一とする肋膜にかゝつても尙直ぐ近所の醫者に行くのに可成長く鏡台に同ひ白粉の刷毛をたくらずには居れないといふのが、せめてもの女の身だしなみの可愛さとも、又深く女性本能に根ざした虚飾の淺薄さとも思はれて、同じ様に腹立たしく淋しい氣持に變りはなかつた。大三郎はそれに絶へず鞭を加へてやらねばと心の内で切に思つて居た。

「をぢさん、持つて來ましたよ」

大三郎は暖いうどん汁の入つて居る鉢を、大事そうに片手に移しながら、他の片手で作りの悪い襖を開けた。

「今行かうと思つて居た所だつた。どうもわざ／＼使までしてもらつては」

叔父はそう言ひながら房子の枕元にある火鉢から離れて立つて來た。寝てゐる房子は、襖を開けて入つてくる大三郎を見て只微笑んだ。

「風が強い、今夜は」と言ひながらも、鉢の中の汁がこぼれぬ様に靜かに叔父に手渡すと、叔父は一應自分の横にそれを置いた。叔父と大三郎は火鉢を圍んで房子の枕元の座つた。

「今日はね、うどんです。肉か魚かあるといいけど、とても今時買出しできんさうです、これで我慢して下さいと、母が言ひましたから」

「どうも寒い所を。今先歸つた許りで、そろ／＼貰ひに行かうかと思つてゐた所だつたがね」叔父は同じ事を繰返した。「どうです冷めない内に、房子たべろよ」

叔父は裾前に大きな穴のある、それも繕ひが旨く出来てゐないのでかへつて見苦しい色あせたオーヴァを着たまゝ、寒風の中を今しがた保険勧誘から歸つたのであらうか、離れ難い様子で火鉢の側を立つと、七輪の上のアルミ鍋の外、茶碗や箸や、よく後仕舞の行き届かない汚れた小皿を大儀さうに持つて来て、房子の分と自分の分を並べた。房子は一寸身振ひしながら、亂れた髪をなで付けると、丹前を引つけて蒲團の上に座つた。叔父はオーヴァを着たまゝでゐるのが、一層寒さうに見えた。大三郎の持つて來た鉢の蓋をあけると、ぱ／＼と低い天井に向つて昇る湯氣に、大三郎もほつと息をつく思ひであつた。

房子が腰付いた後叔父一人の男世帯では到底病人に對する栄養料理等と言ふものが出来る譯ではなく、まして品不足の折から、大三郎の母はお茶の方だけは何んとか出来るだけ世話しようとした。只それを持つて行くのに、家では元々使用人が事變以來少くなつてゐた上に、兵役にとられぬ小僧も徴用令に出て行つて小間使をする者がなくなつてゐた。試験の後で遊んでゐる大三郎にはもつて來いの仕事だと母は言つたが、若い良家の娘達さへ、三月、半年と軍需工場へ徴用されてゐる時代に何かそんな手傳ひでもして自ら慰め度いものがあつた許りではない。どんぶり鉢や皿をかゝえて破れたオーヴァで衝を行かねばならぬ叔父の姿を思ふと、自分の事の様に恥かしく思はれ、かへつて自分で持つて行つてやる方が氣の安まる思ひであつた。

食事が済むと大三郎もすゝめられるまゝに旨くもないお茶を一緒にのみながら、道々見て來た時局下の師走と言へる暮らしい氣分もない街の様子や、戦争のその後の情況について話すのであつたが、叔父は氣輕な相槌を打つかと思ふと、

思ひ出した様に「酒屋や菓子屋の前は蛇の行列だ。まるで蛇だ」と自分で言つてはおかしい位一人で笑つた。房子は房子で、變んな事を笑ふ叔父を笑つた。大三郎は叔父の笑ひを奇妙に思ひ、房子の笑ひを輕々しいものに思つて口をつぐんだまゝ火鉢に顔を落して灰に字を書いてゐたが、その内に母のことづけを思ひ出した。

「醫者から電話があつたんだ相ですが、房子はやつぱし濕布は、溫濕布の方が良い相ですから」

「茸蕩の方がやつぱり良いんぢやらうな、……熱も引く様だが……」

「私はきらひ、蒲團がじつくりだわ」房子は毛虫でも嫌ふ様に言つた。

「油紙を敷いたら良いぢやないか」大三郎が言つた。

「油紙なんかあるもんですか、今頃、それに茸蕩はなんだか部厚くて、氣持ちが悪くて仕様がないわ」

叔父はだまつて居る。大三郎は言はずには居れなくなつた。

「勝手許り言つたつて黙目だよ、直らうと思ふなら醫者の言ふ事も聞かなけりや」

房子は明らかに不平な顔をした。

「病人の内は一人前ぢやない譯だからな。勝手な事は言へん筈だがね。少しはお父さんの言はれる事も聞かなければ」

相變らず他人事の様に黙つてゐる叔父の代言を大三郎はしてゐた。

「お父さんだつて嫌ひでせうが、茸蕩は直ぐ冷えるし、夜中に代へるのなんか」

叔父はぶつくと、早く直るのならその方をしなければならぬと、他人事の様に繰返すのであつたが、確かに人の善

さの半面、面倒がつて物事を成行きに任せる一面もあつた。

ある晩等は、濕布を取換へるのに、何度父を呼んでも生返事だけは直ぐしても、一向濕布をしてくれさうになく、高軒ですぐ打忘れて失ふので、わざと父を起してたのむのが臆劫に思はれとう／＼房子は、自分で自分の濕布の取換へをした。その翌朝はひどい熱が出たが、熱を計るのにもそれ以後は父を呼ばずに寝たまゝ自分で計り、自分で表に書込

んだ、それを大三郎や母達は房子のわがまゝと一番心配したが、晝間は多く家を空ける叔父相手であり、大三郎達といつても時折自分達の都合の良い時しか出掛けないのであるから、天井を相手に寝てゐる許りの房子には止み難い感情の發散でもあつたらうか。

夜は手数のかゝらぬエキホスにして、晝の間だけ菟蓐にしようか。エキホスはそれにしても藥屋で買出せるだらうか、買出せるも買出せぬも溫瀑布が良いと醫者が言ふなら菟蓐にしなければ、といふのは表で、菟蓐なら安上りで濟むといふ切ない心が裏で働いてゐる叔父、房子は房子で、私にはエキホスでも良いと醫者が言つた……と、何時迄たつても埒のあかぬ腹立たしさに、大三郎は空になつた鉢を持つて立上ると、それでも「兎角、醫者は電話でそう言つて寄越したさうだからね」と、房子に向つて念を押したが、自分も又埒のあかぬ話の仲間には入つた様な腹立たしさを感じた。叔父の馬鹿丁寧なお禮を、むしろ淋しく背に受けながら暗い庭道を通つて外に出ると、寒月に白く砂利道が浮いて見え、ひゆうひゆうと電線が風に鳴つてゐた。

翌日になつても落ちない北風の中を、自轉車で大三郎は二、三日前に房子に約束してゐた毛布を買ひ求めて街を走つた。

房子は重たいと言つて蒲團を嫌つた。それは瀑布や体温を計る事と違つて、房子のわがまゝといふよりむしろ素直な病人の請願である様に思へた。

自轉車を走らしながら、大三郎は頭の中には、その重たいといふ古蒲團や、房子の寝亂れた髪から、叔父の破れたオ1ヴァ、低く煤けた天井、日の射さぬ汚れた畳、今にも抜けさうなふわ／＼した床、ごみ／＼した玄關、暗い庭道、それに沿ふた冷たい壁……等から、とりとめのない昨夜の話の腹立たしさが次々に浮んで來たが、その内に、房子の病氣が自分達の力だけではなんだか到底本當には直らない様に思はれて來た。時折飯の御茶や、見舞ひを持つて行つたり、此んなにして毛布を捜し廻つてやつたりしても、それはむしろ大三郎達を道義心の満足で樂しましてゐる様なもので、

結局袋小路の奥のあの家を房子達が出なければ……出る様にならなければ、そしてたとへ冗談にも一萬圓領收等と叔父が書かなくなり、房子が作り人形の美しさやわがまゝから抜け出す様にならなければ、……たとへ此度の病氣が一度直つたとしても、それは一時の氣安めに過ぎないのではないか。勝手に會社に入つたり出たりする氣儘では、直つた病氣が又何時ぶり返さぬとは限らない。といつて、叔父や房子が今の生活を抜け切る様に祈つてもそれは持つて生れた顔を他人のものと取換へたい夢より實現がむづかしいであらう。どうにもしようのない苦しみが一瞬感じられたが……さうだとすれば、やはり燒石に吸込まれる水の様に果敢なくとも、そして單なる道義心の満足に過ぎない様に見えても……母が作る御茶を持つて行つてやらう、慰めてやらう、毛布も是非買出さねばならぬ。そんな事を頭の中でしきりに考へながら街の通りに氣を配りつゝ大三郎はせはしくペタルを踏んでゐた。